

---

# うらぎりミトン

日午 俊矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うらぎりミトン

### 【Nコード】

N8403H

### 【作者名】

日午 俊矢

### 【あらすじ】

いわゆる失恋を描いた作品です。

上手にアップルパイが焼けなくなった。もう一人身なのだから焼く必要もないのだけれど、一週間に一度作ってはカツちゃんにふるまっていた料理だ。なぜか食べたくなってしまうのはその為かもしれない。

友達は終わった恋を引きずるのは良くないという。別に引きずってなんかと強がっても、今こうしてアップルパイを作っている自分はやはり恋を引きずっている女そのもの。

もうカツちゃんは私の部屋に来てくれない。もう赤の他人になってしまったのだから、一週間に一度の二人きりの時間はもう来ない。携帯にはまだカツちゃんとの軌跡が残っている。履歴を見ていくと、ああ、あの日は二人で夜遅くまで電話したとか、この日は二人で旅行の計画立てたっけとか。

アップルパイを口に運びながら、私は未練がましく携帯のメールを眺めていた。そしてときおり溜息をつく。

窓から私の曇り色の心を照らすかのように、太陽の眩しい光が差し込んでいた。外は雲ひとつない青空なんだろうか。

やけどをした指が痛い。パイを作っている最中はずっとミトンをはめていたはず、どこでやけどをしたんだろう。やけどなんてカツちゃんといいた時は一度もしたことが無かったのに。

結局、作りすぎたアップルパイは全部食べ切れずにゴミ袋に捨てることになってしまった。最初から分かっていたけれど、少食の私にはこんなに食べられない。

もう一度、赤くなった指を水で冷やしながら、私は未練がましい女だろうか考える。

カツちゃんは私のアップルパイを恋しく思ってくれているだろうか考える。

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8403h/>

---

うらぎりミトン

2010年10月20日11時38分発行